

スピーカーが壊れるか耳が壊れるかの先を競うかのようにけたたましくアフリカの音楽がそこら中から鳴り響く。そこへ後ろから体の何倍もある袋を頭に載せてバランスよく小走りで駆けてくるムココテーニと呼ばれる運び屋さんの「邪魔だよ、どいてどいて」という声が聞こえる。まぶしく光る色とりどりのありとあらゆる商品の前で、値切り交渉のやり取りがそこら中から聞こえてくる。ショッピングはあまり好きではないが、マーケット散策は私の趣味のひとつである。しかも一文無しで行くただの冷やかしなだ。

ケニアの首都ナイロビには大小無数のマーケットがある。どこの町や村に行っても必ずあるマーケット。朝市やある特定の日だけ開くマーケット。ある商品だけに特化したマーケット。そして大都市の消費を支える迷路のような巨大マーケット。名前もないような村の小さなマーケット。そしてブラックマーケット。そこには、そこで暮らす人々の生活が溢れている。何を食べて、何が売られているのか、物価はいくらなのかの情報に溢れている。買うほうも売るほうも真剣だ。そしてなにより飾ることのないおしゃべりが楽しい。マーケットの中には必ず食堂もあり、看板もメニューもないが抜群の新鮮さと味にひかれて何度も通ってしまう場所がいくつかある。

たいていは、だだっぴろい場所にトタンや木を並べて作った簡単なお店の作りであるが、何百、何千もの数のお店がひしめき合い、道幅は1メートルもない。そんな場所に、朝一番の農作物を載せたトラックが横付けされていく。キャベツやバナナを満載して数時間かけて地方から運ばれてくる。アフリカといえども、ナイロビには土地を持たないサラリーマン世帯やスラムに住む人々の集まり。日々の食生活は地方の農作物に支えられている。

マーケットには卸し業者たちがひしめいている。大量に仕入れ、それぞれに散らばるナイロビのお



ナイロビのマーケットに向う車の渋滞



ナイロビにあるカリヨコマーケットの正門

店や住宅街そして郊外の町や村へ運んでいく。買ったものは、ムココテーニによって車やバスのところまで運ばれてゆく。穀物、魚、農作物、肉、日用品、衣料品等の品物別それぞれにマーケットが機能している。生産者の手から運送業者によって運ばれ、マーケットを介して卸し経て小売りへと、モノがきちんと流れていることに私は驚いた。そこには、紙幣が流通し、経済が営まれている。植民地からの独立をへて46年。経済は確実に歩き始めている。モノとヒトの流れにそんなことを感じる。

そんな楽しい場所マーケットであるが、そこから見えてくるアフリカの経済の問題も深刻である。アフリカほとんどの国が農業国であることから野菜や果物、穀物の自給率は高い。当然自国産のものがほとんどであるが、なかには外国産のものもある。そして値段を知って知って驚いたことに外国産のほうが安いことがある。砂糖や米はケニアでも多く生産されているにもかかわらず、ブラジ



カバンを縫う職人さんたち



ムラティナという蜂蜜酒の売られている様子

ルから安い砂糖が売られている。タイからの安い米が売られている。ここにも貿易の不均衡は押し寄せている。政治的な圧力を前に自国の生産者の厳しい状況。政府が守ってくれることを期待できない、期待していない生産者の苦悩はずっと続いている。特に、日用必需品（石鹸、プラスチック製品、紙等々）や衣料品・靴は圧倒的に海外からの輸入品である。MADE IN CHINA, TAIWAN, JAPAN の文字が躍る。

衣料品を例にとって見ると、それぞれの民族は



観光客のお土産物屋さんの職人さん

民族衣装を着ていた時代を過ぎて現在は洋装をしている人が圧倒的に多い。スーツにネクタイ、ワンピース、ジーンズ等西洋化している。しかしこれらの安い輸入品のせいで自国の衣料メーカーが育たないのは事実だ。価格で圧倒的に輸入品に追いつ

けない。

例えば、ジーンズもスカートも100円ほどで手に入る。スーツやワンピースは仕立ててもらるのが主流であるが、それでも安い既製品に押されそうな勢いである。消費者も安いほうがいい。そうして、地場産業は発展せず、雇用を創出できず、肥えていくのは輸出入業者ということになる。どんな地方に行っても、輸入品が手に入るのは(MADE IN KENYA を見かけないのは) このためである。

“MADE IN KENYA” を育てていく試みはグローバル化している世界の経済の流れにおいては時代の流れに逆行しているように見える。しかし世界中のものを輸入して、依存して生活している日本人の私からみると同じような道を進んでいるような気がして、元に戻るなら今なら間に合うのだろうかと思われて仕方がない。